

汗

菅田 忠志

「スリッパ!」。背後から突然大きな声が私の背中をゆすった。

慌てて振り向くと、7、8m上から3人のメンバーが団子になって雪渓を滑り落ちてくる。

とつさに体が反応したのか、すぐさまピツケルを雪渓に突き刺し、西足を踏ん張り、滑り落ちてくる3人を受け止める体勢になっていた。

先頭の部員に全体重を預ける形で体当たりさせ、握りしめたピツケルに自分の体重を預け、彼の身体を両足で挟み込み、続いてくる2人に壁を作る形でなんとか停止させることが出来た。

急な雪渓を見下ろしながら、「もしここで止められていなかったら…」とぞつとした。

45年も昔のでっかい「冷や汗」だった。

- 1 -

山岳部北アルプス剣岳での夏山合宿。結構苦しいトレーニングを積んで臨んだ合宿であったが、雪渓の登降訓練だけは六甲山では体験することもできず、新人に対しては慎重に行動した中にも、未熟さからくるアクシデントに、大いに反省させられた山歩きとなった。

その後40余年、いまだにやめられずに山登りを続けているが、「冷や汗」はその後も何度か経験することがあった。

ロッククライミング訓練中に滑り落ちた数秒間に走馬灯のように頭の中を走り去った幼い頃の数コマの光景。

なぜあのような瞬間にあのような光景が頭をよぎったのか、今も不思議な思いが残ったままだ。

もつあのような冷や汗をかく思いはこりこりだ。今は登山のスタイルを変え、カメラ片手にのんびりと「山野草」や「高山植物」たちを話し相手に、

- 2 -

撮影登山を続けている。

いつも素晴らしい姿・形で迎えてくれる彼らのす
みかである自然環境がこれ以上壊されることがない
ことを願いつつ…。



万年雪で埋まった北アルプス剣岳 池の谷を登る